# 古時計百種百話

緑川洋一

『古時計百種百話』定価一八〇〇円
昭和48年11月20日第一刷発行　送料200円
著者　緑川洋一
編集者　菅野梅三郎

発行者　宮崎文子
発行所　株式会社矢来書院
東京都新宿区矢来町122　電話(267)二二二八　二二〇八
印刷所　長苗印刷株式会社
©一九七三

# 古時計百種百話

緑川洋一

古時計百種百話・緑川洋一・矢来書院

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

# 古時計百種百話

## 目次

写真と文
緑川洋一


かにかくに祇園はこひし寝るときも……　12
古道具屋に売られた青春の栄光　15
カチューシャ可愛いや松井須磨子の置時計　16
文字盤くるくるランプ時計　19
パリの空の下蚤の市で初めて買った　20
また蚤の市で買った　23
またまた蚤の市で買った　24
口笛を吹くほろ酔いの青年　27
本職の入れ歯でなおしたドイツ掛時計　28
讃岐円座の時計老人　31
三個で六千円！とんでもない話だ　32
わしは年老いた可愛がっておくんなさいよ　35
一八世紀初期の王宮用時計といわれる　36
アテネアクロポリスの丘に立ちて　39
振り子を忘れた中国時計　40
百余年前の鹿の木彫時計　43
目方で買ったカレンダー時計　44
飽きのこない木製の目ざまし　47

三十分鳴りつづけるドイツ目ざまし　48
鳥籠のロマンと道具屋のいかついおやじ　51
雪中百九十九人青森連隊全滅す　52
私は旅先で蒸発したものと思って下さい　55
池のむこうの青森トドマツの根方に　56
雪国の越後湯沢のアンソニア　59
新潟の道具屋の家宝　60
雪の風物詩横手のかまくら　63
日本女性の八割が使った山形の紅花　64
加賀百万石の骨董屋　67
遠野で見つけた花のパリ　68
みちのくの囲炉裏のそばでいぶされた　71
小京都飛騨高山で買った香時計　72
徳川家康所持の時計にヒントを得て……　75
京都撮影忙中閑あり　76
山陰倉吉土蔵そばと日時計と　79
祇園祭の宵山に聞く枕時計の鉦の音　80
志賀直哉林芙美子ゆかりの尾ノ道　83

いくらでもいいから持ってお帰んなさい 84
発明狂の町の時計師 87
土佐の高知の露店はたのし 88
お寺の書院にあったアメリカ製 91
神話の国高千穂で見つけた風格 92
旅の夜は時計を磨いてただひとり 95
これだけは持って帰らないで下さいよ 96
長崎港ドイツ領事館のわすれ形見 99
外人墓地グラバー邸眼鏡橋 100
ベルの形がなかなかよろしい 103
丸山の料亭花月春雨の間 104
武家屋敷の静かなたたずまい萩の町 107
古典屋の博士木村さん 108
大安仏滅吉凶までも占う 111
前から見ても横から見ても完全なまんまる 112
バンコンベ師の結婚を記念して 115
ベン・ジョンの懐中時計 116
百四十六個の真珠をちりばめる 119

白桃のような肌に吊るされて　155
蒸気機関車の中村由信君　152
横浜甲九拾番シイベルウオルク合名会社　151
パリの恋人セーヌの流れとシテ島　148
美しい緑の七宝傘時計　147
丸に十の字はおはらハー大名時計　144
時計師は大名が丸がかえ　143
写真集国立公園の出版を記念して　140
世界の珍品不定時法の和時計　139
工芸的に凝りぬいた枕時計　136
掛時計収集第一号　135
カリレオ・カリレイと振り子の等時性　132
Ⅲの数字とフランス国王シャルル五世　131
大工の徒弟セス・トーマス　128
木の味を生かした掛時計　127
好きなものは手放したくない　124
孝行息子が病気見舞いに買ってきた　123
潮騒の神島からの帰りみち古市で見つけた　126

生き残った八角時計と金四ッ輪 156
わが家の招かざる客撃退法 159
掛時計を買う時は文字盤に気をつけろ 160
天智天皇の漏刻と時の記念日 163
むかし懐しい地球馬印型 164
船時計交番時計 167
阿波池田と大歩危小歩危 168
女主人の道具屋から買った女ものの目ざまし 171
時計職人の知恵水銀振り子時計 172
自分自身の重さで動く置時計 175
模造品が出てきた奇抜な着想 176
四百日巻きの意味するもの 179
その庶民性を愛す 180
吊るされたパイプのさわやかな音色 183
カレンダー付三越特製時計 184
古本古民芸の店有楽街の吾八 187
美術出版社大下社長の思い出 188
大阪中河内の庄屋さんの床の間にあった時計 191

大丸呉服店のタイムスタンプ時計 192
七つの海を巡った練習船から 195
町はずれの小さな道具屋で 196
岡山県文化賞と記念の時計 199
東京事務所時代のフランス枕 200
掘出物サッパリローマとポンペイ 203
キングスロードの古物市 204
その日パリの古時計屋は休日だった 207
いつ行っても楽天的な蚤の市 208
目下船便で日本に向けて輸送中 211
私と時計 212

企画・渡辺　俊文
製作進行・佐野　潜
題字レタリング・橋本　勇
装本レイアウト・菅野梅三郎
編集助手・平田　治子
印刷進行・横山　良夫

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

# 古時計百種百話

# かにかくに祇園はこひし寝るときも……

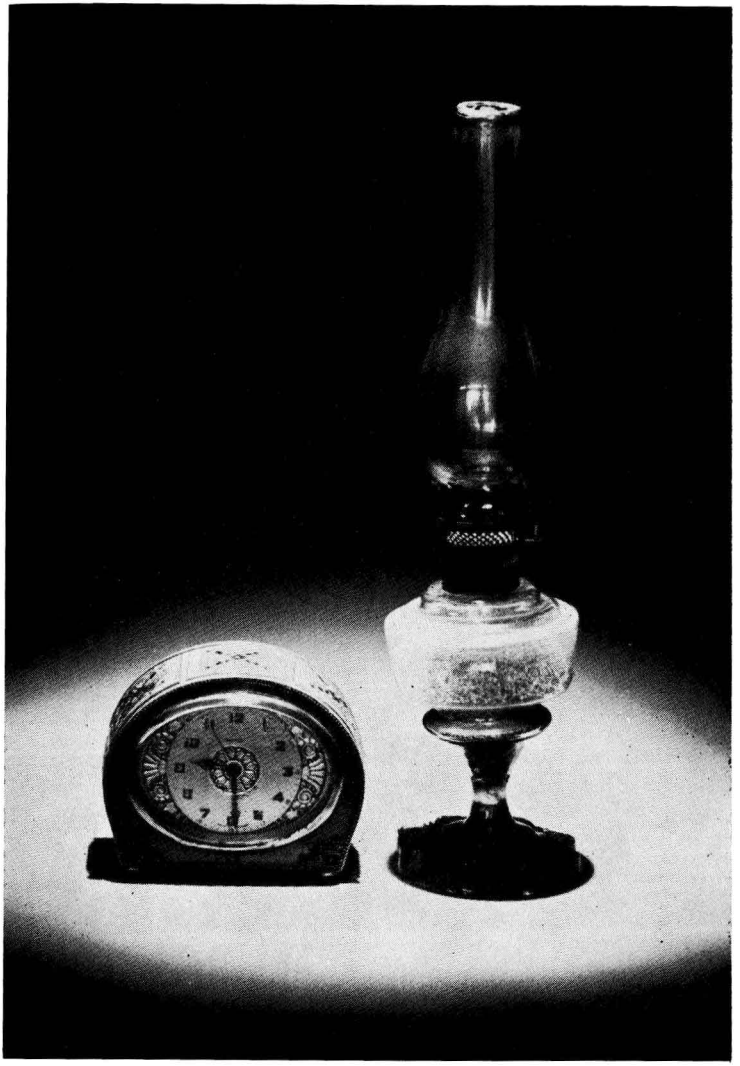
京都祇園に近く、知恩院新門前から鴨川に向かう通りは骨董屋が軒を連ねている。多くは陶磁器、書画などを商う店で、京都を訪れる観光客や外人が良い客かも知れない。その中のある店で女物らしい置時計を見つけた。周囲が真紅の七宝で、色彩が鮮烈である。

ここは花町に近い。当時の売れっ子が旦那に買って貰ったものを、今は年老いて、そっと売りに出したものだろうか。

すぐ裏を、白川女のふるさとに源を発した白川が流れ、流れに沿って竹すだれの家がつづく。

吉井勇は「かにかくに祇園はこひし寝るときも枕の下を水のながるる」とうたっている。あるいはその枕辺にこの赤い時計が置かれていたかも知れない。

中国風のデザインだから中国七宝だろう。あまり古いものではなく、大正から昭和の初めにかけての作。ドイツのキンツレ製。キンツレは置時計の一流メーカーである。高さ八センチ。



# 古道具屋に売られた青春の栄光

若い人たちには理解できないかも知れないが、戦前には〈御賜の銀時計〉というものがあった。帝国大学（いまの東大）を最優秀の成績で卒業すると、天皇陛下から銀時計が貰えた。これを〈御賜の銀時計〉といい、その人たちを〈銀時計組〉と呼んで、将来の栄進を約束されるエリートであった。この銀時計を貰うためには、青春のすべてをかけ、勉学にいそしんだことだろう。あるいは、ガリ勉につぐガリ勉であったかも知れない。

かくして得た〈御賜の銀時計〉も、いまでは古物として道具屋で売られていた。価二万五千円也。おそらく貰った本人の孫あたりが売り払ったものだろうか。息子は親の栄光を思うにつけまだ売る気がしないだろうから……。

私のは古いウォルサム製である。竜頭が三時のところについている。ウォルサムからその後セイコーに変った。私の収集品も孫の代には売られることになるのだろうか……。径四・八センチ。



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.